

みかぐらうた

解説付き



# みかぐらうた（復元版）

解説付き

教祖御在世当時、唯一の印刷本みかぐらうたである、  
明治十四年己五月

## 拾貳下り御勤之歌

と明治十五年の教祖のかぐらつとめ改訂を基にして、  
教祖が教えた「みかぐらうた」を復元しました。

# よろづよ

## おつとめの前歌

世界初めて説く真理

よろづよのせかいいちれつみはらせど  
むねのわかりたものはない

古今東西を見渡しても、真理を知っている者はいない。

そのはづやといてきかしたことはない  
しらぬがむりではないわいな

その筈である。今まで説いた者も聞かした者もないから、知らないのも無理ではない。

このたびはかみがおもてへあらわれて  
なにかいさいをとききかす

今度、教祖が表に出て、世界に向つて真理を一切すつきり説き聞かせます。

このところやまとのぢばのかみがたと  
ゆうていれどももとしらぬ

このつとめのぢばが大和の聖地であると言っても、たすけ合い人間誕生の地、陽気づくめ世界発祥の地であることは、知らなかった。

このもとをくわしくきいたことならば  
いかなものでもこいしなる

人の世の本性、過去・現在・未来を聞いたら、初めて聞いた事なのに誰でも自分の本性にそつた事なので、前から知っていたように思うでしょう。

ききたくばたずねくるならゆてきかす  
よろづいさいのものもとなるを

聞きたければ、尋ねて来なさい、答えましょう。人の世の事、何についてもくわしく聞かせましょう。

かみがでてなにかいさいをとくならば  
せかい一れついさむなり

私（教祖）が何についてもくわしく聞かすと、世界の人が皆勇むでしょう。

一れつにはやくたすけをいそぐから  
せかいのこころもいさめかけ

皆が急いで世界たすける心になって働き出すと、世界中の人の心が勇んできます。

南無転輪王 よしく

転輪王の心になって世界をたすける心を定めます。

一 下り目

真の豊かさ

一ツ

正月こえのさづけは

やれめづらしい

正月に新たな事に切換えをするように、豊かさに対する考え方の極意を得ることは歓迎すべきことです。

二ニ

にっこりさづけもろたら

やれたのもしや

豊かさに対して、すつきりわりきった考え方を持つと本当に頼もしいものです。

三ニ

さんざいこころをさだめ

蓄財の心になるとさもしくなり、散財の心を定めた人たちの間は、

四ツ

よんなか

豊かになります。

五ツ

りをふく

たすけ合って豊かに暮らす心が行きわたると、

六ツ　むしようにでけまわす

際限なく豊かさが広がります。

七ツ　なにかにつくりとるなら

何につけても散財の心を持って生産につとめると、

八ツ　やまとはほうねんや

その人たちの足元から豊年満作のようになってきます。

九ツ　ここまでついてこい

このような心境になると、

十ド　とりめがさだまりた

豊かな喜びという収穫量が定まりましたよ。

南無転輪王よしく

南無転輪王よしく

## 二下り目

真の治まり

難渋たすけで真の治まり (支配欲の否定)

とんくんとんと正月おどりはじめは  
やれおもしろい

正月を迎える七草をきざむ音のように、足拍子をとっておつとめをして心の切換えをする事は面白い事です。

二ツ

ふしぎなふしんかかれば

やれにぎわしや

今まで思いもかけなかった陽気づくめ世界建設という、やり甲斐のある仕事は皆で力を合わせて取り掛かっただけで、心のつながりができ、にぎやかにあります。

三ツ

みにつく

つとめの理が身につくと

四ツ

よなおり

争いの世界からたすけ合いの世界に、世界観がかわります。

五ツ

いづれもつきくるならば

皆がつとめの理に心を合わせるようになる



六ツ　むほんのねをきろう

争いの心が根こそぎなくなります。

七ツ　なんじゅうをすくいあぐれば

難渋の人を救い上げる心になると、

八ツ　やまいのねをきろう

心の悩み、身の病、難儀な世界もなくなります。

九ツ　こころをさだめいよなら

たすけ合いの心を定めると

十デ　ところのおさまりや

たすけ合いの心を持った人達の所は、争いもなく治まります。

南無転輪王　よしく

南無転輪王　よしく

## 三下り目

つとめの理が元の神実の神

一ツ このつとめは、人間の本性を教えた発生の調和に基づき、究極の理想、陽氣づくめ実現の根拠です。  
ひのもとしよやしきの

つとめのばしよはよのもとや

小さな日本の庄屋敷村のほん何でもない百姓家のかんろだいつとめの場所が、陽氣づくめ世界の発祥の地です。

二ツ ふしぎなつとめばしよは

たれにたのみはかけねども

今まで考えられなかったつとめをする所であるから、今までの価値観に基づく特定の人を頼みにはしてはいない。

三ツ みなせかいからよりあうて

でけたちきたるがこれふしぎ

広い世界から、人をたすける心に目覚めた人たちが当り前のように寄り合って出来上がつて来るのは、たすけ場所の、不思議な程すばらしい姿である。

四ツ ようくここまでついてきた

じつのたすけはこれからや

ようこそおつとめをつとめようという心になってきた、真理に基づく本当のたすけ合いはこれからです。

五ツ いつもわらわれそしられて

めづらしたすけをするほどに

いつも人々から「たすけ一条とは、無欲なやつらだ」と嘲笑されても、めつたにない珍しいたすけが、つとめによってあらわれるのです。

六ツ

むりなねがいはいはしてくれな

ひとすじこころになりてこい  
勝手気まゝな願いをかけてはいけません。つとめで理解した自分の本性と矛盾しない、自分を偽らない心になりなさい。

七ツ

なんでもこれからひとすじに  
かみにもたれてゆきままする

何につけてもこれからは、自分を偽らず、矛盾なく、真理にそって生きていきます。

八ツ

やむほどつらいことはない

わしもこれからひのきしん  
不調和は、心で悩んでも、身を病んでも、人と争っても、つらいものです。私もこれからは、たすけ合つて調和をとる、真理にそつた生き方をします。

九ツ

こゝまでしんぐしたけれど

もとのかみとはしらなんだ

今まで真剣に信仰して来たけれども、このおつとめが「人の喜び楽しむように生れついた」人間発生の真理とは知らなかった。

十ツ

このたびあらわれた

じつのかみにはそういない

そして、このつとめの理は、陽気づくめの世を創る、難渋たすけの生き甲斐で陽気になる真理であることがよく分かった。

南無転輪王

よし／＼南無転輪王

よし／＼

## 四 下り目

心のすませ方

つとめの理に合わせて、心がすみきる

一 ツ

ひとがなにごとゆおうとも  
かみがみているきをしずめ

真理を知らぬ人達が、どのような批判をしても、つとめの理に合っているのなら動揺  
することは無い。

二 ツ

ふたりのところをおさめいよ  
なにかのこともあらわれる

誰とでも、つとめの理に近づく心で話し合おうと、どのような事でも皆うまく行くもの  
です。

三 ツ

みなみていよそばなもの  
かみのすることなすことを

皆見ていなさい、そばにいなながら真理を学ばない者よ、教祖が真理をどのように教え  
るか見ていなさい。

四 ツ

よるひるどんちやんつとめする  
そばもやかましうたてかろ

夜昼ドンちやん騒ぎでつとめをするから、傍な者もやかましく思い、気がかりなこと  
であらう。

五 ツ

いつもたすけがせくからに  
はやくようきになりてこい

常に何とかたすけたいと思っているのだから、早く調和をとる心になりなさい。



六ツ

むらかたはやくにたすけたい  
なれどころがわからいで

身近な利害関係者たちを早くたすけたいと思つてゐる。けれども、何とかしてたすけたいと思つてゐる誠が理解できないでゐる。

七ツ

なにかよろづのたすけあい  
むねのうちよりしあんせよ

何事も万事たすけ合う心が基本である。納得できるよ様に良く考えなさい。

八ツ

やまいのすつきりねはぬける  
こころはだんくいさみくる

悩み、病い、争いのような氣に病む事が根こそぎなくなれば、心はずんずん勇んでくる。

九ツ

ここはこのよのごくらくや  
わしもはやぐまいりたい

私が教えてゐるつとめの場所は、極楽浄土をこの世につくつてゐるようなもの、私ち(誰でも)誤つた考えを払つて極楽に居るよつた境地になりたいものだ。

十  
ド

このたびむねのうち  
すみきりましたがありがたい

つとめの真理を学んだ今は、心のすみずみまですつきり澄み切つた、はればれとした心になつたことがありがたい。

南無転輪王よしく 南無転輪王よしく

## 五下り目

### ぢばの理

教祖が陽気づくめの親心を以って、かんろだいつとめのひながたとして作った元のぢば

一ツ ひろいせかいのうちなれば

たすけるところがままあろう

広い世界の内には、たすけ場所と称する所があちこちにあるだろう。

二ツ ふしぎなたすけはこのところ

おびやほうそのゆるしだす

すばらしいたすけはこの所、お産の祟りや業病の迷信打破の理を流す。

三ツ みずとかみとはおなじこと

こころのよごれをあらいきる

つとめの教理は清水のように、心の矛盾を洗い切る。

四ツ よくのないものなけれども

かみのまえにはよくはない

欲のない者ないけれど、つとめの理により、身惜しみさえも消えてゆく。

五ツ いつまでしんぐくしたとても

ようきづくめであるほどに

ここまで信心したからは結構になりたいはやめにしたすけ一条続けよう。

六ツ

むごいこころをうちわすれ  
やさしきこころになりてこい

人に勝とうはやめにして、人をたすける心になろう。

七ツ

なんでもなんぎはささぬぞえ  
たすけいちじよのこのところ

ここはたすけ場所、争そう構えはいらんもの。

八ツ

やまとばかりやないほどに  
くにぐまでもたすけゆく

大和だけでは世界たすけが後れる、世界中につとめのちばを作りましょう。

九ツ

ここはこのよのもとのおちば  
めづらしところがあるわれた

ここはたすけ場所のひながたや、清く正しく保ちましょう。

どうでもしんぐするならば

こうをむすばやないかいな

どっちみちたすけ一条通るなら、誠の心の人づくり、つとめのちばを作りましょう。

南無転輪王

よし／＼南無転輪王

よし／＼

六下り目 扇の伺い つとめの理で思案する

一ツ ひとのこころとゆうものは  
うたがいぶかいものなるぞ

人は誰でも、新しい考え方には、そんなことはないと思つものである。

二ツ ふしぎなたすけをするからに  
いかなることともみさだめる

思いもかけないたすけをするからには、どんなことも見極めている。

三ツ みなせかいのむねのうち  
かがみのごとくにうつるなり

世界中の人間の本性は、鏡に写すように、人をたすける心が真の誠であることはわかっている。

四ツ ようこそつとめについてきた  
これがたすけのもとだてや

ようこそ、自分の心が人の喜びを楽しむ本性を自覚するつとめを学んでくれた。これが世界だすけの基本です。

五ツ いつもかぐらやておどりや  
すえではめづらしたすけする

いつでも、かぐら・ておどりのつとめを学ぶと、その結果おどろく程のたすけ合いの成果をあげる。



六ツ　むしよやたらにねがいである

うけとるすじもせんすじや

無性やたらに願いでても、真理に合っていれば成就するが、合っていないければ成就しない。

七ツ　なんぼしんぐくしたとでも

こころえちがいはならんぞえ

どれだけ一生懸命信仰しても、悟り違えていてはよい結果はない。

八ツ　やっぱりしんぐくせにやならん

こゝろえちがいはでなおしや

やっぱり真理に従って生きなくてはならない、心得違いはやり直しです。

九ツ　こゝまでしんぐくしてからは

ひとつのこうもみにやならぬ

こゝまで信仰して来たのであるから、信仰の成果がないようではいけません。

十ド　このたびみえました

おうぎのうかがいこれふしぎ

この度理解できました。かんろだいつとめの理に合わせて生きることはすばらしいことです。

南無転輪王　よしく　南無転輪王　よしく

## 七下り目

真の種まき

たすけ一条に前向きなるが故に散財心で豊。 福田思想

一ツ

ひとことはなしはひのきしん  
においばかりをかけておく

たすけ合う心、豊かな世界づくりをするため、一言の話でも理解し理解されるために働きかけよう。

二ツ

ふかいところがあるなれば  
たれもとめるでないほどこに

しつかり思案して深い固い信念があつてする事なら、誰も反対したり、止める事はできない。

三ツ

みなせかいのころには  
田地のいらぬものはない

世界中誰でも皆がたすけ合う世界づくりに、役立つ働き甲斐のある人生を送りたいものなのだ。

四ツ

よきぢがあらばいちれつに  
たれもほしいであろうがな

良き地に良き種子をまくような働き甲斐がある人生は誰もが求めているだろう。

五ツ

いづれのかたもおなじこと  
わしもあのぢをもとめたい

誰でも同じだ、私も充実した人生を生きたいものだ。

六ツ

むりにどうせとゆわんでな

そこはめいくのむねしだい  
努力して働き甲斐のある人生を送るのも、なまけて無駄な人生を送るのも、皆めいくの心次第、どうこうせいと押付けはしない。

七ツ

なんでも田地がほしいから

あたえはなにほどいるとても

良き地に良き種まくような働き甲斐がほしいなら、努力を惜しんではいけない。

八ツ

やしきはかみの田地やで

まいたるたねはみなはえる

たすけ合いの世界づくりの真理を教えているつとめのぢばだ、この教えにしたがった世界たすけの働きは少しも無駄がない。

九ツ

こ、はこのよの田地なら

わしもしつかりたねをまこ

こはこの世の極楽を作る働き場所、私もたすけ一条の心をしっかり定めて働こう。

十ド

このたびいちれつに

ようこそたねをまきにきた

たねをまいたるそのかたは

こえをおかずにつくりとり

今や、世界中がたすけ合いの喜びに目覚めて働き出してきた。よくぞ、たすけ合ふ心になって働くようになつてきた。つとめの理にそつてたすけ合えば、ごく当然の事として陽気づくめが成就する。

南無転輪王よし〜南無転輪王よし〜

# 八下り目

## 適材適所の世界づくり

同心でたすけ合うと個性的に分業できて平等、同一目的で自主的にたすけ合って調和

一ツ

ひろいせかいやくなかに

いしもたちきもないかいな

広い世界の中に、力を合わせて陽気づくめ世界づくりをする素質に目覚めた人が居ないものかなあ。

二ツ

ふしぎなふしんをするなれど

たれにたのみはかけんでな

今まで考えることもできなかった陽気づくめ世界を作るのだが、特定の人を頼りにはしない。

三ツ

みなだんくとせかいから

よりきたことならでけてくる

皆 だんだんと陽気づくめ世界を作る理想を持った同志が広い世界から力を寄せてくれば成就できる。

四ツ

よくのこころをうちわすれ

とくとこころをさだめかけ

自己中心の偏った心を忘れて、しっかりと思索して、たすけ合って勇む己が心を確かめ固めなさい。

五ツ

いつまでみあわせいたるとも

うちからするのやないほどこに

いつまでもためらっている者にも、自主性を大事にして、こちらから押し付け



たり急かしたりするものではない。

六ツ

むしよやたらにせきこむな  
むねのうちよりしあんせよ

定まった考えもなく、むやみに押し付けたり、急かしたりせず、納得できるよ  
うにしつかり思案しなさい。

七ツ

なにかこころがすんだなら  
はやくふしんにとりかかれ

納得して矛盾がなくなったら、一刻も無駄なく、陽気づくめ世界作りに取りか  
かりなさい。

八ツ

山の中へといりこんで  
いしもたちきもみておいた

広い世界の多くの人の中で、陽気づくめ世界作りに働ける適材適所の人は見極  
めてある。

九ツ

この木きろうかあのいしと  
おもえどかみのおねしだい

この人材、あの人材と思うだろうが、陽気づくめ世界作りに適した、教祖の  
心になった者を選ぶ。

十ド

このたびいちれつに  
すみきりましましたがおねのうち

今や、適材適所の世界ができて、世界中の人の心の矛盾もなくなり晴れやかになる。

南無転輪王よしく／＼南無転輪王よしく／＼

# 九下り目

心定めのことめ

理解して、納得して、自分を生かすことめ

一ツ

ひろいせかいをうちまわり

一洗二せんでたすけゆく

広い世界をかんろだいつとめであつとめ廻つて、一洗い二洗いと心のほこりをはらつて、たすけて行く。

二ツ

ふじゅうなきよにしてやろう

かみのころにもたれつけ

不自由する人が居ない世の中にしてやろう。それには教祖が教えたつとめの理を理解して、教祖の心を我が心として、それに基づいて生きなさい。

三ツ

みればせかいのころには

よくがまじりであるほどに

よく考えてみると世界一般の考え方には、自己中心の歪んだ考えが混じっている。

四ツ

よくがあるならやめてくれ

かみのうけとりでけんから

偏つた歪んだ考えがあるなら、心構えを改めなさい、真理を正しく理解できなくなる。

五ツ

いづれのかたもおなじこと

しあんさだめてついでこい

世界中、誰でも同じ事です。良く考えて納得してから、私(教祖)の生き方について来なさい。

六ツ むりにでようとゆうでない

こころさだめのつくままでは納得できないのに、無理に物事をするのではない、納得できて、自分の意志を確立してから行ないなさい。

七ツ なかくこのたびいちれつに

しっかりしあんをせにやならん  
新たな真理に目覚めた今は、誰でも皆納得できるまでよく考えなくてはなりません。

八ツ 山の中でもあちこちと

てんりんおうのつとめする

このつとめで教祖と同じ心になれるのだ。広い世界の中、彼方此方で難渋たすけの心を持った転輪聖王になれるかんだいつとめをする。

九ツ こ、でつとめをしていれど

むねのわかりたものはない

こゝ私（教祖）のひざ元で、形は私の教えた通りにつとめをしても、たすけ一条の心を定めるつとめを教えた、私の心をわかってつとめている者はいない。

とてもかみなをよびだせば

はやくこもとへたずねでよ

どっちみち信仰するなら、正しい信仰をするため、早く真理に基づいた正しい教えを説く私のところで学びなさい。

南無転輪王よし〜南無転輪王よし〜

# 十下り目

病のもととは心から

一ツ

ひとのこころとゆうものは

ちよとにわからんものなりし

このつとめで、人の本性が人をたすける心であると、真理を学ぶまでは、人間が何を考えているのかわからない、と思つていました。

二ツ

ふしぎなたすけをしていれど

あらわれでるのはいまはじめ

今までも不思議なはたらきがあつた世の中であつたが、このつとめではつきりと調和の世界であると示されたのは、世界で初めてです。

三ツ

みづのなかなるこのどろを

はやくいだしてもらいたい

水に例えるほど世界に満ちている思想・宗教に、混じつていゝ誤つた考えを、誤りであると確認して除きたいものです。

四ツ

よくにきりないどろみづや

こころすみきれごくらくや

物欲・支配欲が自己中心的に歪んでしまふと泥水のようなだが、たすけ合い人間のたすけ合い世界と、すつきり見極めると極楽のような安らぎがあります。

五ツ

いつくまでもこのことは

はなしのたねになるほどに

いつまでもこのことは、話の種になります。



六ツ

むごいことばをだしたるも

はやくたすけをいそぐから

自分の不幸が前生因縁のせいでもなく、人のせいでもない、今の心遣いが原因  
と言うのは、一見むごい言葉のようだが、これがたすかる早道です。

七ツ

なんぎするのまこころから

わがみうらみであるほどに

難儀な目を見るのも、たすけ合いの調和を失った心遣いが原因で、自分の考え  
違い、通り違いにあるので、神の罰でも、通り返しでもない。

八ツ

やまいはつらいものなれど

もとをしりたるものはない

心の悩みや、身体の不調和はつらいものであるが、その真の原因を知っている  
者は今までいなかった。

九ツ

このたびまではいちれつに

やまいのもとはしれなんだ

このつとめで真理を教えるまでは、世界中は神の罰や通り返して病気になる  
と考えて、本当の病いの原因を知らずにいた。

十ド

このたびあらわれた

やまいのもとはこころから

この度、おつとめで真理を理解したら、悩みも病も難渋もたすけ合いを忘  
れた人間の心にあることが分かった。

南無転輪王よしく 南無転輪王よしく

# 十一下り目

ひのきしん

教祖が世界たすけるためにぢばを作ったのにならって、私達もたすけ場所を作ります。

一ツ ひのもとしよやしきの

かみのやかたのぢばさだめ

日本の庄屋敷村のたすけ心を持った人達の働き場所づくりの基になる心定め。

二ツ ふうふそろうてひのきしん

これがだいいちものだねや

身近な二人がたすけ合うことから世界たすけが始まります。

三ツ みればせかいがだんくと

もつこにのうてひのきしん

よく見ると世界中は争いの世界からだんだんとたすけ合いの実践をするようになって来た。

四ツ よくをわすれてひのきしん

これがだいいちこえとなる

欲を忘れてたすけ合うと豊かな暮らしになって来る。

五ツ いつくまでもつちもちや

まだあるならばわしもゆこ

皆が陽気世界つくりになすけ合って喜んでいる。私もたすけ合いに加わろう。

六ツ　むりにとめるやないほどに

こころあるならたれなりと  
たすけ合いの仲間になるのに資格はいらない。誰でもたすける心があればよい。

七ツ　なにかめづらしつちもちや

これがきしんとなるならば  
皆樂しげに語り合いたすけ合っているが、これが世界の建て直しになっている。

八ツ　やしきのつちをほりとりて

ところかえるばかりやで  
今ここにあるものをやりとりするだけで、陽氣世界を作るのに充分なのです。

九ツ　このたびまではいちれつに

むねがわからんざんねんな

今まで世界中の人々は、世界の真理も、人々のたすけ合いの喜びも分からなかったのが残念。

十ド　ことしはこえおかず

じゅうぶんものをつくりとり

やれたのもしやありがたや

今はたすけ合いの本性に生まれたこと、たすけ合うと勇む自分に目覚め、難渋たすけの生き甲斐で暮らせることが有難い。

南無転輪王よし　南無転輪王よし

# 十二下り目

大工の人もそろいきた

(世界たすけを家のふしんにたとえて歌う)

一ツ

一に大工のうかゞいに

なにかのこともまかせおく

はじめに言う。何を、どうして作るか、つとめの理に基づいて正しく考えている者に指導をまかせる。

二ツ

ふしぎなふしんをするならば

うかがいたて、ゆいつけよ

陽気づくめ建設という、思いもかけないすばらしい仕事をするなら、真理に基づいて指導しなさい。

三ツ

みなせかいからだんくと

きたる大工においかけ

みな世界から次々と寄って来た指導力ある人に、何からでもわかってもらいなさい。

四ツ

よきとうりようがあるならば

はやくこもとへよせておけ

よい指導者がいるなら、世界たすけの仕事に力を協せてくれるように働きかけなさい。

五ツ

いづれとうりよう四人いる

はやくうかゞいたて、みよ

どうしても指導力ある人が、少なくとも四つの部門に必要なになる。教理から考え合わせて準備しなさい。



六ツ

むりにこいとはいわんでな

いづれだんくつきくるで

世界たすけのために無理に協力を頼まなくてもよい。理解したらみな思案して心定めてついで来るから。

七ツ

なにかめづらしこのふしん

しかけたことならきりはない

思いもかけないすばらしい陽気づくめ世界建設は、やりかけたら皆生き甲斐をもって当然のように喜んで続ける。

八ツ

山の中へとゆくなれば

あらきとうりようつれてゆけ

無理解な人達を説得するには、山の中から木を伐り出すような力強い指導者も必要です。

九ツ

これはこざいくとうりようや

たてまえとうりようこれかんな

また木を切ったり刻んだり柱や梁を作る指導者も必要。土台を作り柱や梁を組立て上げる指導者も、また住めるように仕上げる者もいる。

十ド

このたびいちれつに

大工の人もそろいきた

もう今は、世界中に、世を建て直す力を持った者も揃ったから、さあ、取りかかりなさい。

南無転輪王

よしく南無転輪王

よしく

# かぐらつとめ

ちよとはなし かみのゆうこときいてくれ

「ちよとはなし」

教祖が教えることを聞いてしっかり思案しなさい

あしきのこととはゆわんでな

悪い事は言わないから

このよのぢとてんとをかたどりて

天地陰陽の調和に合わせて

ふうふをこしらへきたるでな

ふうふが補い合いたすけ合つと

これはこのよのはじめだし

たすけ合い人間が生まれ、たすけ合い世界が生まれます。

よし〜

〈この身体親から私に生き通し 心はころく入れ変わる〉

あしききははらうて たすけせきこむ

あしき心づかいを払って

たすけを急ぎこむ

いちれつすまして かんろだい

真理によつて矛盾をなくして

勇んで暮らせる世界を創ります

元の理七回、天然自然の理七回、陽気づくめの理七回つとめます

## 心 定め

### 元の理 (誕生)

人の喜び楽しむように 生まれついたのこの私

### 天然自然の理 (現在)

たすけ合えば勇む たすけ合わねばいづむ ここまで育つたこの私

### 陽気づくめの理 (未来)

陽気づくめの世を創る 難渋たすけの生き甲斐で 陽気に暮らすこの私

つとめの理が神 (元の神(理)・実の神(理)・三下り目)



ておどりつとめ

「よろづよ八首」 おつとめの前歌

今まで誰もが知らないつとめ 陽気づくめに世を変える

十二下り 一せいの手おどりで同心

一下り目・七下り目 真の豊かさ、散財心。陽気づくめの種を蒔く。

二下り目・八下り目 真の治まり、難渋たすけ。適材適所の世をつくる。

三下り目・九下り目 調和をつくるたすけ合い。世界の人は転輪王。

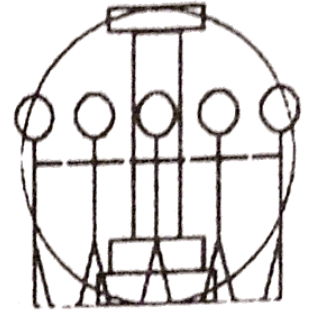
四下り目・十下り目 悩みも病も難渋も、調和できない心から。

五下り目・十一下り目 誠を教えるちばの理を世界に広めるひのきしん。

六下り目・十二下り目 かぐら・ておどり方針定め、一手一つで取り掛かれ。

六面のかんろだいの各面にかんろだいに向かって立って、十二下りの歌で示した基本の真理を理解し、形に表わし、次の人々に伝えるために同じ手振りですとめます。





かぐらつとめ

「ちよとはなし」はかんろだいで身体の存命の理を教えた。  
 「かんろだいつとめ」で心の存命の理を表した。

①元の理は生命体の分析

生命は調和体（元の神）



②天然自然の理

天然自然

十二下り

- 一・七下り
- 二・八下り
- 三・九下り
- 四・十下り
- 五・十一下り
- 六・十二下り



③陽気づくめの理は一手一つ  
 同心・同意で分業して調和

たすけ合い方（実の神）



雌  
雄

かんろだいの理を表わす雌・雄役の二人を中心に、すいき役の人を北にして、八人が八方からそれを囲んでつとめます。

かんろだいが据えられている場合は、かんろだいの役の二人は八人の作る円の外でつとめます。教会本部の場合は中北(雌)中南(雄)は東側でつとめています。場所によっては一番見て学べる方位でつとめることが可能。

元の理七回、天然自然の理七回、陽気づくめの理七回つとめます

神道天理教当時の朝夕のおつとめは「てんりおうのみこと」「ちよとはなし」「いちれつすましてかんろだい」で明治二十一年東京の神道天理教会本部で、本席のお許しがなかったのにつくられたものです。教祖御在世当時、夜昼どんちゃんつとめすると言われた日常のおつとめは、十二下りの手おどりで真理を学んでおりました。毎日十二下りをつとめる人もあれば、一下りの人もあるというように、つとめ方には差がありました。

つとめを学んで心を作りたすけ一条にはたらくことが信仰の証しでありました。

教祖時代のみかぐらうたが、今まで整理されず、解り易く印刷されたことがなかったから、この度、出版することにした。

明治の始めから天皇制国家の神道教理に基づく思想統制があつて、応法の理しか印刷できない日本の歴史がありました。

敗戦によつて法的な規制はなくなつても、占領軍に合わせなくてはならないという事その他にも、いろいろの事情があつて、永年皆が覚えてきた応法の理で良いのではないかという意見もあつて復元が後れました。

世界の情勢は、天皇制軍国主義時代の思想の説き方が許される状態ではなくなつています。それで、真柱様の教祖への復元が、強く説かれたものと思ひます。このような時代の要請で、今度、はじめて『みかぐらうた』（復元版）として印刷いたします。

念のために申し添えますと「天理王命」の神名は、明治二十一年東京の神道天理教会本部が、本席がおさしづで禁止しているのに、目標札を発行しました。その時から使われるようになったのです。

立教一六〇年正月二十六日の春季大祭の真柱の神殿講話で、「教祖が教えてくださったか  
んろだいつとめを国々所々の教会でつとめるのがよふぼくの任務である」というお言葉をい  
ただきました。それ以来、その努力を進めて四代真柱様も立教一六三年春季大祭の神殿講話  
で「つとめは、第一義はぢば・かんろだいを囲んで勤めるかぐらつとめを指しますが、その  
理を頂いて、国々所々の教会でも月々のおつとめを勤めるのであります。」とおっしゃいま  
した。

教祖が教えてくださったおつとめに復元いたしますと、このようになります。

教祖時代のおつとめは、よろづよから始まって十二下り、そして、かぐらつとめです。

よろづよから十二下りのておどりの部分で心を作って、かぐらつとめをする。だからこの  
順番になっていたのです。かぐらと言われる部分は「ちよとはなし」からはじまり、「いち  
れつすましてかんろだいい」です。

皆様のなじんでいる「あしきをはろうて たすけたまえ てんりおうのみこと」というつ  
とめは、明治二十一年東京に神道天理教会本部が出来た時、朝夕のおつとめとして、本席の  
許しもなく作られたものであります。神道天理教会本部が奈良に移転した後、東京で前川菊  
太郎の名前で出版された『御かぐら歌』に初めて載ったもので、教祖時代にはなかったの  
です。



立教一六五（二〇〇二）年十月二十六日発行  
立教一七一（二〇〇八）年八月二十六日改訂

櫟本分署跡参考館

〒<sup>632-</sup>0004 天理市櫟本町三〇七一  
Tel 〇七四三（六五）四九〇二